



# 名著『イングランドにおけるガーデニングの歴史』を読む 第1回

## A History of Gardening in England



竹歳 誠

公益財団法人 都市緑化機構 評議員

新型コロナウイルスによる「ステイホーム」、「巣ごもり」が続く中で、庭のある人はガーデニング（庭いじり）、庭のない人はベランダでのコンテナ・ガーデニング（鉢植え）を楽しむ人が増えたと耳にした。英国の王立園芸協会のウェブサイトにはロックダウンの3カ月で2,200万の検索ヒットがあったと言われる。日本と英国は昔から園芸が盛んな国である。1975年に日本を訪れたエリザベス女王は「日英両国民は多くの同じ特質を持っています。この類似性は庭を愛し、車を道路の左側を走らせる趣味にまで及んでいます」と宮中晩餐会で挨拶された。

英国における園芸の歴史に関して、学術的な著作として最初に書かれたものは、アリシア・アマースト Alicia Amherst の『イングランドにおけるガーデニングの歴史』（1895年）とされる（図1）。しかし、その古典的な重要性にもかかわらず、日本では今まで一部の専門家を除いては知られることの少なかった文献である。幼い頃から庭いじりが大好きで、園芸家、植物学者として名を成したアマースト（1865～1941年）は、社会的に有用なガーデニングに強い関心を示し、環境の悪い都市地域において煤煙に強い花の栽培を推奨するとともに第1次大戦中には市民農園や校庭の活用を推進した。

筆者とこの本の出会いは、都市計画協会の機関誌『新都市』に「田園都市は誤訳か～農地としての garden に関する覚書～」(平成13年12月号)を執筆した際、参照した加用信文氏の『イギリス古農書考』の中に本書が名著として引用されていたことに始まる。ただ、専門書の宿命で本書の翻訳は出版されていなかったもので、越澤明北海道大学教授(当時)の紹介により、英国の都市計画専門の古本屋から原書を取り寄せることにした。本書の特徴は、中世以来の修道院や王室の会計簿などが

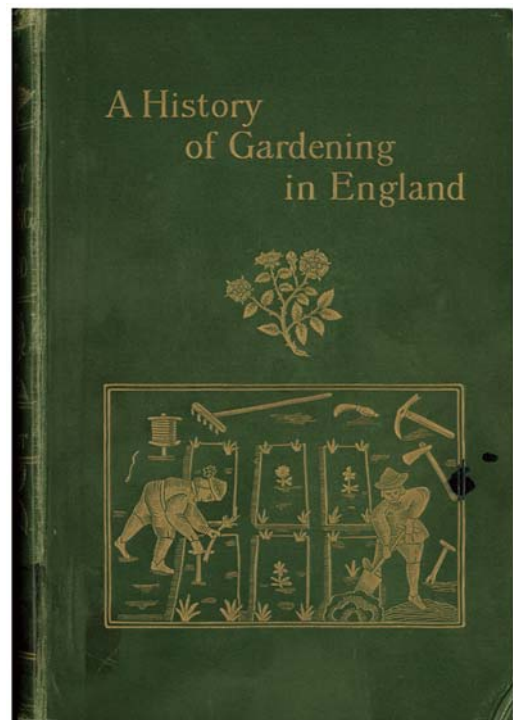


図1 『イングランドにおけるガーデニングの歴史』書影

ら丹念に、どのような植物が実際に栽培され利用されていたかを実証的に拾い出していること、そして様々な文学作品などからの引用によりそれぞれの時代に人間と植物がガーデンを通じてどのように関わってきたかを生き生きと描き出していることである。ただ、著者自身が「長たらしく、退屈な」tediousと認めているように、薬草、野菜、果物の名前を延々と書き連ねたリストは、学問的価値は別として、一般の読者にとっては相当の忍耐が必要とされるものである。

したがって、随所に出てくる中世英語、ラテン語の翻訳の大変さもさりながら、今さら100年以上前の本を和訳することにどのような意義があるのか、誰でもが躊躇するところであろう。ところが最近になって、本書が現代において

も学問的価値が高いことを認識したケンブリッジ大学出版会が、2013年に本書初版の復刻版、2014年にオンライン版を出版したことを知った。そこで、造園史、緑化技術等の調査研究の一助になればと願い、都市緑化機構の機関誌『都市緑化技術』に4回に分けてその要約を紹介し、あわせて機構のホームページ <https://urbangreen.or.jp/gardeninginengland> に、関連する部分の全文（仮訳）を掲載してはどうかとの企画が持ち上がった。本書（第2版）は13章314ページ、補遺、参考文献等を加えると405ページの重厚な装丁の書物であり、その全体構成は以下のとおりとなっている。

序文	第2版序文	vii
図表リスト		x
第1章	修道院のガーデニング	1
第2章	13世紀	33
第3章	14世紀および15世紀	45
第4章	庭園に関する初期の文献	65
第5章	チューダー朝初期の庭園	77
第6章	エリザベス朝のフラワーガーデン	109
第7章	エリザベスとジェームズ1世当時のキッチンガーデン	135
第8章	エリザベス朝時代の庭園に関する文献	165
第9章	17世紀	179
第10章	ウィリアムとメアリー時代のガーデニング	213
第11章	風景式庭園の夜明け	235
第12章	風景式庭園	263
第13章	19世紀	287
補遺	議会調査	315
参考文献	イングランドのガーデニングに関する著作	331
著者リスト	ガーデニングに関する著作	390
索引		396

（原文ページ）

今回の翻訳は1896年の第2版に拠っている。著者の序文によると、1895年9月の初版はあっという間に売切れてしまったので、多くの点を書き足す間もなく1896年6月に第2版を出すことになったが、第2版ではいくつかの図面を差し替えるなど初版に修正が加えられたと述べられている。その意味で第2版が著者にとっての正本と言えるかもしれない。

なお、植物名など技術的知見については都市緑化機構の専門家の助言を得てできるだけ誤りのないよう努めた

が、全体の責任が筆者のみに属することは言うまでもない。また訳語については、本書の中心的用語である garden について予め読者の理解を得ておく必要がある。基本的に重要なことは、garden とは「囲われた土地」のことであるが、その意味が歴史的には実用の場から鑑賞の場へと変遷してきていることである。日本語においても、古代では実用の「庭」と鑑賞の「園」は明確に区別され、「庭園」は明治半ば以降の比較的新しい言葉とされる（白幡洋三郎）。また、一つの英単語に対し、日本語では文脈に応じて多様な用語が用意されていることがある。したがって、同じ garden でも、農家では庭とか畑、修道院では初期の頃は庭、時代が下れば庭園、貴族の館は庭園などと使い分けをした。同様に、gardening は農作業から素人の庭いじり、プロの造園技術までを含み、gardener も農民自身、専門の庭師、近代の造園設計者まで表すことから、その文脈に応じて使い分けることとした。そしてこの幅広い意味全体をカバーする必要がある場合には、一つの訳語を選ぶことができないため、英語をそのまま片仮名表記にせざるを得ず、それが、まさに「イングランドにおけるガーデニングの歴史」というやや不器用なタイトルとなっている理由である。

それではこれから第1章から第3章までを見ていくこととしよう。

## 第1章 修道院のガーデニング

イングランドにおける庭園の歴史は人々の歴史とともに一歩ずつ歩んできた。平和で豊かな時代には庭園は繁栄し、戦争と混乱の時代には沈滞した。この国を支配した様々な民族や統治した支配者が違えば庭園もはっきりと違いがわかるほど影響を受けてきた。

ローマによる征服以前において、英国では庭園の名に値するものは存在しなかったし、植物を育てるために彼らが何か努力したというような事実はまったく知られていない。大プリニウスは、ローマにおいては「ガーデンとは貧しい人の耕作地そのものであり、下層階級が日々の食料を得るのはガーデンからであった」と語った。今なお広く使われている野菜の多くはローマ人によってこの国にもたらされたものであり、この土によく馴染み、極めてしっかりと根付いたものは、ローマ文明が衰退しても生き残ることができた。



タキトゥスが1世紀に書いたところによると、英国の気候はオリーブとブドウを除きすべての野菜と果物に適していると述べている。その後ほとんどブドウでさえも栽培され、ある程度成功したように見える。

ローマ帝国の没落とその後の蛮族の侵入により、ガーデンニングに対しても致命的な打撃が加えられた。ラテン語に遡ることができるサクソン語の植物の名前により、アングロサクソン人がローマの植物の名前の多くのものに通じていたことがわかった。たとえば、ミントはラテン語では *Mentha*、アングロサクソン語では *Minte*、英語では *Mint*、ブドウはそれぞれ *Vinea*、*Win treow*、*Vine* という具合である。サクランボ [セイヨウミザクラ] *cherry*、キャベツ、レタス、ネギ、タマネギ、大根、バラ、パセリのような植物はこの国で引き続き育ったかもしれないが、園芸の復活はキリスト教の拡大と修道院の設立が行われる数世紀の後まで待たなければならなかった。

庭は修道院にとって最も基本的な付属物であり、それは野菜がその住人が毎日食べる食事の大きな部分を占めて

いたからだ。したがって修道院が建設されると同時にその周りに庭が造られたに違いなく、そしてこれらの庭は、当時、庭という名に値する、多分ほとんど唯一の庭であった。修道士たちが大陸から持ち帰った植物は、主に薬として乾燥した状態で輸入されたと推察されるが、それは英語の *drug* 薬という単語が、アングロサクソン語の動詞 “*drigan*”、すなわち *dry* [乾燥させる] から来ていることから明らかだ。

庭 *garden* を意味する古い単語は “*wyrtzerd*”、植物の場所、あるいは “*wyrttun*”、植物の囲い地であった。“*Wyrt*” または “*wurt*” はあらゆる種類の野菜やハーブを表す単語として使われ、現代の単語である植物 “*wort*” と同じであり、これはセイヨウオトギリソウ “*St. John's Wort*” (“*herb John*”) などの多くの植物の名前の接尾語となっている。修道院の庭の一部は花は育てないで草が植えられ *graszerd* と呼ばれた。現代の言葉である *garden* は、この *zerd* という言葉の別の形である *garth* あるいは *yard* であり、これらすべては囲まれた土地を意味するアリア系の語源から由来している。

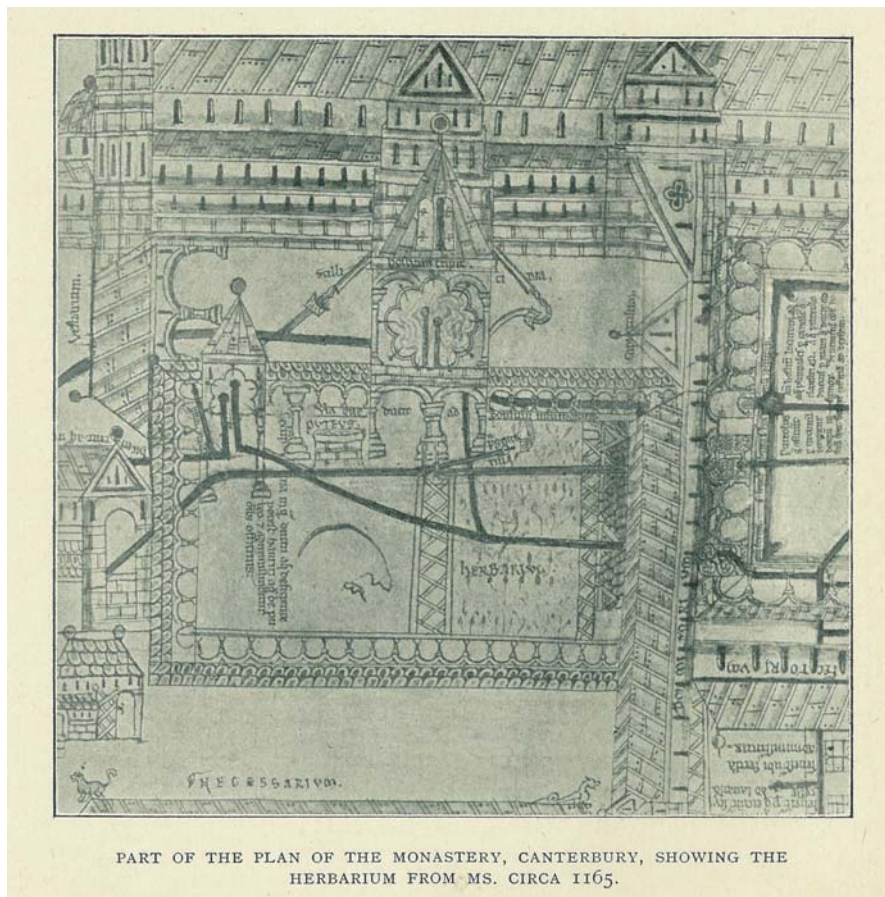


図2 ハーブ園が描かれたカンタベリー修道院の配置図の一部 (写本より1165年頃)



このように初期の段階より何世紀にもわたり、庭には主に実用的な目的のために植えられ、野菜やハーブ類は薬用や日常の食用のために育てられた。花の咲く植物はその美を鑑賞するためだけにほんの例外的に植えることが許された。とは言え、明るく可愛らしい花は居場所がなかった訳ではなく、バラ、ユリ、スマレ [ニオイスマレ] violets、シャクヤク peonies、ケシ類 poppies などは、すべて薬として使用され、ゆえに除け物にされることはなかった。

この国における最も初期の修道院の庭の眺めは、カンタベリーの修道院の建物の配置図、すなわち鳥瞰図に見られるものようであったと思われる。これらの図面は修道院の水道及び排水システムを記録するために作成されたようである。そこにはハーブ園が、宿舎と診療室の間のスペースの半分を占めて描かれており、それは回廊によって囲まれている (図2)。壁の外側には果樹園とブドウ畑が広がっており、また養魚池の近くの壁の内側に樹木も記されている。

修道院の生活は急に変わることはなく、多分 14 世紀の庭は 12 世紀のものと同様変わらなかったが、14 世紀になると文字による多くの資料が入手できるようになる。修道院の中には庭師はじめ各担当部署が置かれ規則正しく運営された。保存されている庭師の会計簿を見ると収入支出の金額等がわかるが、植物の栽培のプロセスなどまでは特定できない。

すべての国において、またすべての時代において、花は葬式、結婚披露宴などの儀式において重要な役割を果たしてきた。これらの花を修道院の壁の内側の庭園で栽培することは聖具保管係の仕事であった。庭師の仕事は庭園だけではなく、果樹園とブドウ畑にも及んでいた。果樹園では食用、料理用のリンゴや洋梨だけではなく、リンゴ酒 cider 製造のためにリンゴを生産した。サクランボはローマ人により持ち込まれた時以来、この国において人気の高い果物であり、サクソン初期の時代においても栽培が続けられた。ある時期、イングランド全土にわたり、多くのブドウ畑が広がっており、修道院も熱心にブドウ畑を改良、拡大した。また堀と池も庭師の仕事であった。いろいろな庭園を区分する等の役割を持っていた溝の清掃や、堀および池の魚を捕まえるためのネットとバスケットを買っていたこと

が記録に残っている。修道院の庭園の管理の詳細は会計簿からわかるが、当時の庭園の姿については、分厚い生垣や養魚池以外には残っていないのが一般的である。とは言え、絶え間ない争いの時代にあつて、修道士たちが世俗から離れた回廊中庭の世界を楽しんでいたことは想像できる。

また、十字軍の騎士団もイングランドの庭園のための植物を東方遠征から持ち帰った。その一例がスズカケノキ Oriental plane [*Platanus orientalis*] である。このように多くの方法で、修道院的な規律が園芸という科学を維持し、またその知識を周辺へと広めていった。そして実際にやって見せることで、お説教とあわせて、実用的な生活を通じて「働くことは祈りであること」を世に示したのであった。

## 第2章 13世紀

ノルマン征服 [1066年] に続く時期、この国は絶え間なく海外での戦争に突き進むとともに国内では混乱が続いた。当時、庭園を静かに楽しむ考えなどほとんどあり得なかった。この困難な時代にあつて、命と財産の安全のためには、できる限り外から近づけないような場所に住むことが必要であった。これは修道士が基本的には肥沃な谷間を選び、そこに修道院を建て、果樹園、庭、ブドウ畑で栽培したのとは正反対であった。しかしながら、このような不利な状況にもかかわらず、果物の栽培をやってみようとする動きは珍しくはなかった。

王室会計文書 Exchequer rolls などには、12世紀、13世紀の王室庭園の様子を示す記述が少しずつ残されている。1259年、ヘンリー3世 [在位 1216～72年] はウェストミンスター宮殿の大規模な改修を行い、「ローラーで庭園部分の土地をならす」労働者への支払いなどが見られる。ヘンリー3世の主たる庭園はウッドストックにあつたが、その中には「美しきロザモンド」の悲劇的な運命として有名になった「女性の私室」を隠すための迷路があつた。迷路自体は珍しいものではなく、大昔から迷路が存在していたことの証拠は存在している。ヘンリー3世は庭園に改良を加え「大ハーバリウム」“great herbarium”を芝生で敷き詰めることを命じた。ハーバリウムという用語は、普通はハーブが育てられていた場所というぐらゐの意味な



のであろうが、この場合は、あずまや arbour のことを指す古い英語の “herber”、すなわち小屋 shelter とか隠れ場所 “harbour” という意味で使われているように見える。

ロンドン周辺には、ウェストミンスター、チャリング、ロンドン塔に加えて、ほかにも王室の庭園が存在した。市民が所有している小さな庭について、「郊外に住む市民たちの家々の外側のすべての横に庭が隣接しており、そこにはゆったりとし見た目も楽しい木々が植えられている」との一節がある。ロンドン近郊ホルボーンに大庭園を所有していたリンカーン伯爵のすべての荘園については会計簿が残されており、そこには麻 hemp、**コーン**、豆 beans、マメ類 pulse など売却されたすべての生産物が記載されている。これらの帳簿に記入されている梨の多くはフランスから来たものようである。エドワード1世 [在位 1272 ~ 1307 年] がスコットランドとの戦争を開始した日に、果物が献上された。このような大事件によって当時最も知られていた梨の名前が明らかにされるということは興味深い。サン・ルール梨 “S. Rule”、カルウェル the “Calluewell” or “Calwell”、パ・プセル the “pas pucell” or “pase pucell”、マルタン “Martins” という4種類の梨はリンカーン伯爵の帳簿にも載っており、このほかにも、ゴールド・ノップ “gold knopes” pear、リンゴ、マルメロ quinces、栗 chestnuts なども記載されている。特に目を引くリンゴの品種として、何世紀にもわたって最も人気のあるコスタード the Costard [英国種の大きなリンゴ] がある。もう一つの人気の高いリンゴの品種はペアメイン the Pearmain である。初期の頃、これはリンゴ酒用に使用されていたことがわかっている。これらのほか、特別なものとしてサクランボ、マルベリー [クワの実] mulberries、セイヨウカリン medlars、さらには桃などがあった。

以上引用してきた様々な会計簿は、同じようなものばかりで退屈ではあるが、この時代の果物と庭園に関する情報源としてほとんど唯一の信頼できるものである。このように大量の果物を供給するには広大な果樹園があったに違いない。庭園は、当時創設され始めていたオックスフォードやケンブリッジの様々なカレッジの周辺にも造られつつあった。果物と野菜の栽培が大幅に増加したことの証明として、ロンドン市内および周辺の庭師とロンドン市長との間で起

きた 1345 年の論争ほど明確なものではなく、それは庭園の生産物を売ることが許される場所に関するものであった。

### 第3章 14世紀および15世紀

イングランドでは 14 世紀後半から 15 世紀初めにかけて大きな変化が起きていた。貿易と産業が発達し、園芸が復活した。当時、貧しい人々は主として野菜を食べて生きていたようである。チョーサー Geoffrey Chaucer [1340 頃 ~ 1400 年] は、食べ物には野菜しかないのに庭を持っていない物語のヒロインの極貧状態を描くにあたって、彼女は道端の草に頼らざるを得なかったと書いた。この時代の始まりは黒死病が国を覆い尽くしたが、それにもかかわらず、人々が比較的平和に暮していれば、ガーデニングと農業が復活し、生活にゆとりが生まれた。

中世においては、今私たちがキッチンガーデン [菜園] とでも呼ぶものが、ほとんどの場合、家に付属して造られた唯一の庭であった。美しさや楽しみのためだけの庭園という考え方は、ほんの二次的な位置づけしかなかった。初期の料理本を見ると、野菜の料理用の様々なレシピが書かれているが、野菜だけが料理された品はほんの少ししか載っていない。庭の主な役目は詰め物と香り付けのためのハーブを作ることであり、ハーブは好きだけ使えた。タマネギ、ネギ、ニンニクは幅広く使われた。フェネル [ウイキョウ] fennel は一般によく使われたハーブの一つであり、緑の葉っぱ、そして種も食用とされた。ミントはフェネルとともにソースとしてよく使われた。チョーサーは両者が一緒に栽培されている様子について述べている (バラ物語)。パセリはこれらよりもさらに一般的かもしれない。サフラン saffron は驚くほど大量に料理で使われ、それに支払われた金額も大変大きかった。庭に植えるその他のハーブの中で、キャベツ (ケール kale) は主要な場所を占めていた。14 世紀および 15 世紀には、果物の種類は広がり、量的にも十分な供給が行われた。ウォーデン梨 Wardens は各種料理の中で依然として一番人気が高かった。梨料理のレシピで梨と言えば、それは普通、ウォーデン梨のことであった (図3)。

オレンジはおそらくもっと早い時期から機会を見てはこの国に持ち込まれていたと思われる。サクランボはとても広



図3 ウォーデン梨 (Black Worcester pears)  
ウォーデン大修道院ブドウ園 (2020年9月)  
©Margaret Roberts  
<https://www.wardenvineyard.org.uk/warden-pear/>

範囲に栽培されていた。その収穫の季節はラングランドにより「サクランボの季節」と語られた。サクランボの収穫は夏の盛りにあたり、お祭り騒ぎの時であった。サクランボとイチゴはロンドンの街角で売り歩かれ、「熟れたイチゴはいかが」の呼び声は身近なものだった。桃、セイヨウカリン、プラムも栽培された。

当時の庭師たちは接ぎ木に多大な注意を払い、農民教育で最も基本的とされたのは、接ぎ木に熟達することであった。ガーデニングと農業に関する初期の著作者たちの多くはその論考の相当部分を接ぎ木に割いており、果物の色や香りを変える様々な実験が行われた。

当時の庭園は通常四角く囲われた土地であり、その境界は石、煉瓦、漆喰の壁かあるいは分厚い生垣で囲われていた。あずまや、すなわち「自分だけの遊び場」のない庭園はあるべき姿の庭園とは考えられなかった。どの庭園にも水を貯めておく池の類が設けられ、多くの場合、精巧な装飾が施された噴水が一つ真ん中に置かれた。このような庭園に植えられた花の種類はそれほど多くはなかったが、それらの限られた種類の花が植えられた数ときたら、それはおびただしいものであった。ツルニチニチソウ periwinkle / parwinkle は広く愛好された。黄色い花の中でマリーゴールド [キンセンカ] marigold は目立つものと言えようか。スマレは「広く知られたハーブ」であり、その甘い香りによるだけでなくサラダ用のハーブとして栽培され、生で、またはタマネギ、レタスと一緒に食用に供され

た。バラには、赤と白の二重咲きのバラ、一重咲きの赤白、そしてどこにでもあるイヌバラ dog-rose、またスイートブライアー sweetbriar [野バラの一種]があった。ユリは庭園の中でバラに次いで重要な地位を占め、詩人の歌の中ではバラとどちらが多いかを張り合っていた。キショウブ yellow flag と紫のアイリスはユリと同じようなものとして語られることがある。ほかの花は野原や森から持ち込まれ、栽培される中で多分改良されたのであろう。中世において花壇に咲いていたゼラニウム geranium はフウロソウの一種である wild cranesbill、あるいは小さなハーブロバート [ヒメフウロ] herb Robert であった。マツムシソウの一種である wild scabious とケシ類 poppy は、現代の私たちの庭で言えば1年草・2年草のような目立つ存在であった。しかし、多くの在来種は立派な見栄えがするもので、キバナノクリンザクラ cowslips、スイセン daffodils、サクラソウ primrose、ジギタリス foxglove、マーレイン [モウズイカ] mullein、セイヨウオトギリソウ St. John's worts、リンドウ gentian、オキザリス oxalis、マロー [ゼニアオイ] mallow、ムギセンノウ corncockle、ヤロー [セイヨウノコギリソウ] yarrow、センノウ、マンテマなど champion、シマセンブリ centaury、スイカズラ honeysuckle などよく知られた植物が育てられていた。また庭の一角にはシャクヤク peony や背の高いタチアオイ hollyhock、トリカブト monkshood flowered の花が咲き、日影の隅にはつやつやした葉のシダの一種のコタニワタリ hartstongue が生い茂り、細長い花壇の一部はナデシコ類 pinks、セイヨウオダマキ columbines で明るく彩られ、あるいはラベンダー、ローズマリー、タイムの甘い香りが漂っていた。チョーサーの時代の庭園の花を描写するにあたって、デイジーは最高に手入れされた庭園の中でこそ輝いていた。チョーサーが描いた庭園は、理想化されたものとは言え、当時の庭園を、詩人の目を通して、忠実に描写していたことは間違いない。

■全訳版 (仮訳) の公開について

『イングランドにおけるガーデニングの歴史』の全文について、その仮訳を順次、都市緑化機構 HP にて公開中です。併せてご覧ください。

< URL > <https://urbangreen.or.jp/gardeninginengland>

都市緑化技術 編集部

